



許すまじ
コロナ

GOLOS

交

キケット

02.23

小説

- 有流 「暮れる夏に音」… 6-7
智均 「ついでに」… 8-13
ヨシコ 「日常」… 14-20
蒼 「竜一の〈はあらし〉の話」… 21-41
秋雨善哉 「放課後」… 42-43

背表紙

20e



表紙

マダモウ行きたかった…

絵

- マダモウ行きたかった… … 1
リルト … 2
虎真 … 3
たに … 4
20e … 5











暮れる夏に音

有流

「あーもう、ほんと最悪……」

誰もいない校舎に僕の声だけが響く。一年生の教室がある四階の廊下をずんずんと進んでいき、一年三組のドアを勢い良く開けた。

「さーて、ノート、ノートと……。あった!」

しばし自分のロッカーを漁ったのち、置いて帰っていたノートを手取る。夏休みも残り一週間となり、そろそろためていた課題を終わらせなければならぬというのに、ノートを忘れていた自分のため息を吐いた。

ノートをカバンにしまい教室を出ると、どこからか柔らかな高音が聞こえてきた。吹奏楽部の誰かが居残って練習しているのだろうか。

音をたどって屋上へ続く階段を上っていく。ドアノブを握り、目を閉じて一度だけ深呼吸。思い切ってドアを開けると、そこにはフルートを手に不思議そうな顔でこちらを振り向く女子生徒が立っていた。彼女はこちらを見つめたまま口を開く。

「君、私の音が聴こえるの?」

にわかには信じがたい話だが、彼女はどうかやらすでに亡くなっていくらしい。三年の夏休みに夜まで学校で自主練習をした帰りに事故に遭ったのだという。

「夏のコンクールで演奏する曲にフルートのソロがあって、私とも

う一人の同級生のどちらかが演奏するかって話になったの。最後のコンクールだったからどちらでも譲らなくて、最終的にオーディションをして決めることになったんだ。」

彼女はフェンスのむこう、赤と紫が混ざる遠くの空に目を向ける。

「あの子はものすごくうまい子だったけど、私だって負けるわけにはいかなかった。だから、学校に残れるギリギリの時間までいつもここで練習してた。車にぶつかった時、ああ私死ぬんだなっていう予感があったけどどうしても諦めきれなくて。こんなところで死んでる暇はない、もっと練習しないといけないんだから、って念じたせいか。気づいたらここにフルートを持って立ってた。」

僕は思わず口を開く。

「それからずっとここで練習を?」

「うん。いつも気づいたら夕方になって、夜まで無我夢中で吹いて、気づいたらまた夕方になってるの。そうしてるとだんだん夏休みの終わりに近づいていくのか夜風が涼しくなっていて、また熱帯夜に戻ってる。もう何回繰り返したのかもわからない。どれだけ練習しても、もう私の音は誰にも聞こえないのにね。」

彼女はどこか寂しそうに、手の中のフルートに目を落とした。

夏休みの夕方にとらわれ続けている。不意に、そんな言葉が脳裏をよぎった。同時に、彼女をそこから解放することはできないだろうか、だなんて考えてしまった。

僕は彼女の音をたどって今ここにいる。そうであるならば……。

少し考えて、僕は彼女に一つのお願いをした。

「ねえ、君の音を聴かせてよ。」

彼女は僕の言葉に困惑しながらもフルートを構えた。どうやら僕のお願いを聞き入れてくれるらしい。

静寂が、夏の暮の屋上を支配した。

次の瞬間、彼女の音が静寂を塗り替えた。高く低く、柔らかな音色に身体ごと包まれる気分さえ感じられる。彼女の束ねた長い髪が揺れる涼しい風すらその音に操られているかのようなだった。時に激しく、時にやさしく奏でられる音に感情が揺さぶられる。

最後の音が空に消える。日はもうほとんど暮れていて、空にはいくつか星も浮かんでいた。僕は言葉も何もかも忘れて、ただただ立ち尽くしていた。

「ねえ、なんで泣いているの。」

「そんなわけ……あれ?」

構えていたフルートを下ろして僕の顔を見た彼女がポツリとこぼす。慌てて頬に手をやると、確かに少し濡れていた。

「なんでだろう、わかんないや。すっごい感動したんだけど、それを上手く伝える言葉が見つからないんだ。」

「なにそれ。ちゃんと聴いてたの?」

笑いながら尋ねる彼女の目尻がうつすら光って見えた気がした。

大丈夫、君の音はちゃんと聴こえたよ。

「じゃあ私はもう少し練習するね。君は用が済んだなら早く帰りな

つい最近

智汐

バサッ バサッ バサッ

清々しいくらいの蒼が続く空の下、一人の少女が石階段を頼りにとある山を上っていた。周りには鬱蒼とした森林。隙間なく並ぶ木々たちはその山に深碧のドレス着せているようだ。山道に乗った石階段は斜め上へと緩やかに続いており、ほぼ平地と変わらない。にも関わらず少女はうつむき、息を切らしながらその一段一段を踏みしめていた。少女の右手には紙紐のついた紙袋が握られており、これを大事そうに持ちながら足を進めている。

少女はある程度歩くと、伏せていた顔を上げた。その瞳に映るのは変わらず続く石と木の群れ・・・あと雲。溜め息を漏らし、あと偶然そこにあつた階段の踊り場に腰を下ろし、紙袋をのぞき込んだ。持っていた紙袋の中には溶けかけの保冷剤と包装された小さな箱。それと麦茶が入ったペットボトル。少女の目当てはペットボトルの方だったらしく、紙袋から取り出すと器用にキャップを外した――

その瞬間。

一際大きい羽音。少女は思わずペットボトルを腕で覆った。少女が思い浮かべるのは数日前、つい最近の事象。それは海辺で食べようとしたサンドウィッチが全て海鳥に持ち去られてしまう、という出来事だ。今の行動は唯一のオアシスである麦茶を守らんとする少女の条件反射でもあったのだ。

一瞬の静止の後、少女は何か気づくと鼻を鳴らした。「いや・・・ここ山じゃん」

本人も分かり切ったことを口にした後、少女は麦茶を口にしようとしてペットボトルを両手に持った。焙煎された麦の香ばしい匂いが喉の渴きを強調する。いざ、と目を閉じ、ペットボトルの底を高く上げその麦茶を口内へと注いだ・・・が、舌に落ちたのは数滴。

少女の頭に浮かぶクエスチョンマーク。目を開けるとそこには筒を持つ形の両手だけがあった。肝心のペットボトルが消えているのである。辺りを見渡すがどこにもない。手からすっぽ抜けた感覚もなかった。だが、すっぽ抜けたのならもう無理だ。きつとこの階

段を転げ落ちて、少女にとつて帰らぬモノとなってしまうている。だが、それでも探さずにはいられない。水分なしでこの階段を上り切るなど不可能だからだ。

バサッ バサッ バサッ

狼狽しているとまた大きな羽音が聞こえてきた。それもさつきより大きい、近いのだろう。きつとこの鳥が取ったのだ、と親の仇でも見るような視線を上へと飛ばした。見えるのは鳥とは思えない程大きな影。太陽を背にしているからか、その姿はハッキリと視認できない。だが、左右にのびている羽でわかる。このシルエットは鳥である。

数秒後、影は少女の前へとゆっくり下りて来た。

「・・・え」

少女から落ちる間の抜けた声。ムリも無い。現れた影の正体は少女の予想していた姿ではなかったからだ。

「ごめんなさいね。これ、あなたに返すわ」

それは喋り、それは歩いた。その姿のつぺんには人の顔。少女よりは年上であるかのような顔で、黒の長髪に見目の良い容姿をしている。全体像はまるで人間だったが、人の腕に当たる場所からは白く美しい翼が伸びていた。腰

つきは人間と呼べるくらいの幅であったが、その曲線は蛇を思わせるほど細く、妖艶である。体は2つの足によって支えられ、その足は明らかに鳥のものである。ちなみに、ペットボトルはその足にてしっかりと捕らえられていた。「本当にごめんなさい。アナタがこんな子供だったなんて思わなくて」

「は、ええと・・・普段はお年を召した方が、通るんですか？」

「うん、そうなの。いつもは香水臭いクソバアとか太ったクソジジイが来るから嫌がらせをするのだけど、今日は違ったみたいね。麦茶、返すわ」

その美しい姿から放たれる荒い言葉遣いに呆然としていたのか、少女は麦茶を受け取ると渴きを思い出したように口に流した。潤される喉に下がる体温。正常な思考力を取り戻した少女はまずある言葉を頭に浮かべた。

妖怪、である。その言葉は人の常識を外れた生き物である、とだけ少女は認識している。この少女、実はこの状況にそこまで驚いていない。何故なら、その類の生き物なら一度見たことがあったからだ。というか、少女がこの山を登っている理由にもその類が関わっていた。この程度のハ

した。その髪飾り、随分古い物のようだが不思議なことに全く使った形跡が無い。今日はよく頼み事をされるな、と少女は心の中で呟きつつも引き受けた。少女は頼まれたら断れない性分であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

謎の髪飾り、残った団子、お返しのみ物や菓子折り、お…来る時よりも何故か増えた荷物を両手に、少女は来た道を通る。残った団子は妖怪の好物だからと持ち帰らされた物だ。頭を下げる老婆を後に、少女は山寺を出た。その頃には空は茜色に染まっていた。上から見下ろす石段の風景は清々しいもので、上るときに感じていた忌々しさが嘘のように思えるほどだった。

お目当ての妖怪は階段を數十回下りると現れた。空高くから聞こえる羽音が、降りてくる彼女のご機嫌を表している。

「こんにちわ、もうお帰り？女の子のこと聞けたかしら？」

「あ、あ、あの。そのことなんですがー」

少女の声は震えていた。ある程度見慣れた妖怪と云えど、目の前の生物が常識で測れないモノであるには変わりない。

彼女の機嫌を損ねれば……そう考えると少女の震えは止まらないのであった。

「どうしたの？あのババアに何かされたの？！」

「う、うー。あーそのー」

妖怪が心配そうに覗き込む。が、少女の視界に入るのは彼女の鋭い鉤爪。これを持つてすれば人の肉など布のように裂けてしまえそう。覗く歯もよく見るとかなり鋭利な形状だ。噛みつけば人の喉笛など数える間もなくかつ切れるだろう。もう少女の目にはその姿が凶器の体現にしか見えない。目をつぶり、意を決して例の髪飾りを差し出した。

「ごめんなさい！もう女の子には会えないそうですっ！」

山をくだます少女の声。そして一瞬の静寂。

少女は恐る恐る、臉を開けた。その目に映ったのは髪飾りを手に取り、涙を流す妖怪であった。

「この……髪飾り、あの子のためについて、私が、盗ってきたモノだわ。」

妖怪は泣きじゃくる子供のように息を詰まらせながら喋った。

「これをあの子にあげて、そしたら、あの子が怒って、私、

気まずくなって、ちよつと遠くへ飛んで、帰ってきたら、あの子がいなくなつて……」

崩れ落ちた妖怪は鼻を鳴らしながら、その場にうずくまっていた。足をたたくで顔を伏せるその姿は、どこか少女よりも幼い子供のように見える。どうすればいいのかわからない少女は、うずくまる妖怪をじつと見ていた。しばらくすると妖怪は立ち上がり、吹っ切れたように顔を上げた。

「だから私、あの子に謝りたかったの……でも、もう会えない。そうよね」

「はい、そう聞きました。それに、寺の中には子供はいませんでした」

少女が訪れた寺には和尚や年を取った人しかおらず、確かに妖怪の探すような人物はいないのだった。

「何で会えないのかわからないままだけど、人間に退治されるのも嫌だし……あなたが言うのなら、信じようと思う。ごめんなさいね、私の我が儘に付き合わせちゃって」
「えいえい、と返す少女に、妖怪はまた真つ白い羽根を差し出した。

「これあげる。何か困ったことがあったら、これを燃やして。気づけたらすぐにあなたの所まで飛んでいくから」

そう言つて、妖怪はゆつくりと羽ばたき、舞い上がった。

「きつとこ以外だったらまた会えるから、またね。ババアには私の代わりにサヨナラを言つておいて」

また一つ頼み事をして、妖怪は茜色の空の向こうへと消えていった。

その後、少女は健やかに成長し、立派に成人。人並みに恋をし、人並みに暖かな家庭を持った。ささやかに老衰で亡くなる頃には実に、齢八十八まで歳を取っていた。が、それまで妖怪の羽根が使われることはなく、羽根が燃やされたのは少女の葬式の日であった。話を聞いた彼女のひ孫が妖怪に彼女の死を知らせようと、呼んだのである。

「そんなの嘘よ！だってあの子と会ったのだって、つい最近の事なんだから！」

しかし、ひ孫が説明しても、妖怪はそう言つて彼女の死を信じないのであった。

日常

ヨシコ

「しまった、買い忘れた」

定時で会社から上がり、愛しい恋人が待つ我が家への家路を急いでいた私は、その場で足を止めた。手には先ほどスーパーで購入した食材がたっぷり入っているレジ袋が二つ。しかし、その中に本日買わなければいけなかった一番大切な商品が入っていないことに私は気づいたのだ。『たっぷり生クリームのスペシャルプリンアラモード』、さくらんぼやメロンなどの果物がたっぷりの生クリームによって濃厚たまごプリンに飾られたちよっとお高いコンビニスイーツだ。「怒るだろうな……」

自分の好物を買い忘れるというドジを踏んだ私をすねながら叱る恋人の姿は、それはそれで愛しく素敵だろうが、それをわざと拝もうとするのは我ながら意地が悪いなと思う。それに加え、私は夕食後に私が買ってきたスイーツを、幸せを噛みしめるように味わうあの表情を眺める時間がたまらなく好きだった。小さな一口を掬っては目を細め、味を堪能し、美味しいねと微笑みかけてくれる。その笑顔を見るたびに胸が満たされた。これがまさに日常の中のささやかな幸せというものなのだろう。

家路へと急いでいた足を来た道に戻るように逆方向へと進める。ここから最寄りのコンビニまでは15分、そこから少し遠回りにはなってしまうが我が家まで20分というところだ。合計約30分、たったそれだけの時間でもどかしくてたまらない。あふれ出る思い

に比例するように足どりが早くなる。自分が帰ってくるのを待ちわびているであろう恋人の姿を思いうかべながら、コンビニにより買い忘れたスイーツを買うために、私は歩きなれた道をたどった。「ただいま!」

逸る気持ちを抑えて鍵穴を回し、ドアを開いて電気をつける。その音に呼応するように、とたとと足音が聞えた。おかえり、と微笑む笑顔が私の目に飛び込み、今日一日の疲れが一瞬でどこかへ飛び去ってしまう。朝、駅のホームで人にぶつかり悪態をつかれたことも、午後の仕事で部下のミスを押し付けられたことも、この笑顔で思い浮かべるだけで全てがどうでもよくなるのだ。

「君の好きなプリン、ちゃんと買ってきたよ」

えっ、と少し見開かれた瞳はすぐに三日月形に形を変える。ありがとう、晚ごはんおわたらいいしょに食べようね、そんな会話をしながら、私は日常の中の小さな幸せをひっそりと噛みしめた。

カーテンの隙間からそよそよと心地のよい風が入り込む。窓の外ではぼかぼかとした陽射しがあたりを照らしている。本日は日曜日の午前10時、仕事は休み。おだやかな気持ちで私は二人分のカフェオレを準備していた。愛しい恋人はまだベッドの中だ。

昨晩、久々に映画でも見ようと思いつき、二人で見たいね、というの日に話していたアクション映画を借りて帰った。たまにはこんな日があってもいいだろうと、その流れで某ファーストフード店に立ち寄り家路についた。今日は映画パーティー!?とはしゃぐあの表

情を見ると、いつの間にか柄にもなく気持ちが高ぶってしまった。2時間のアクション映画を一気に見ると、そのまま遅くまで感想を語り合い、いつしか二人ともソファで寝てしまったのだ。

そして今朝、いつもの起床時間より数時間遅れて目を覚ました私は、隣に寄りかかっていた恋人をベッドまで運び、軽く身支度を整え、こうしてカフェオレを入れている訳だ。コーヒーメーカーから抽出されるコーヒーが半分ぐらいたまった頃だろうか、ふと空腹を感じた。冷蔵庫の中を見ると、卵にハム、それから使いかけのほうれん草……冷蔵庫の中身が空っぽになってから買い物に行くのが習慣なので食材が足りるかどうか少し不安だったが、これだけあるならちよっとしたブランチが作れそうだ。さっそくトーストを焼こうとしてもパンが置いてあるカゴを見るが……しまった、肝心の主食である食パンを切らしていたか。さて、どうしたものか……と考えあぐねていると、何気なくつけていたテレビから聞きなれた料理番組のテーマが流れてきた。そういえば、前にもこの番組を見たことがあったな。確かあのときのメニューは三食丼、だった気がする。見てみて、これかわいくない? そうだな、色に気を付けるだけでこんなに見栄えが良くなるもんなんだな、そんな会話を二人でしたことを思い出した。今、手元にある食材もちょうど三色。おしゃれなブランチとはかけ離れているし、今入れているカフェオレには合わないだろうが、まあこいうゆうのも悪くないだろう。

まずは、お湯を沸かしほうれん草をさつとゆでる。ゆであがったら灰汁を抜くためにしばらく水につけて放置。その間にハムは適当

な大きさに切る。次に卵を溶きほぐしたら、みりん、酒、塩、さとうで味をつける。少し甘めの味付けにするのが二人の『いつもの味』だ。サラダ油を熱したフライパンに味付けした溶き卵を流し込んで炒める。その次はご飯の準備。レンジでチンするだけの便利な代物だ。器に盛りつけたご飯の上に一口大に切ってめんつゆであえほうれん草、準備しておいたハム、炒り卵を載せて……よし、完成だ! ピンク、黄色、緑の三食が色鮮やかで、我ながら良い出来だと思う。そういえば、テレビで紹介していたレシピではハムなんか使っていないかったような気もしてきたが、まあこの際三色あればなんでもいだろう。きつとあの時みたいにかわいいね、と喜んでくれるはずだ。

もうすっかり溜まり切ったコーヒーで炒り卵と同様に甘めのカフェオレを準備していると、寝室の方からこちらへ向かってくる足音が聞えてきた。

「おはよう。ね、これ作ってみたんだ」

そう声をかけると、眠そうな目をこすりながら近づいてきて、すごい……カラフルでかわいいね、とあの愛らしい笑顔で褒めてくれた。途端に心が満たされていくのを感じる。誰かのために食事をつくる醍醐味というものは、このような笑顔をことなのだろうと改めて実感した。

じゃあ顔洗ってくるね、と洗面所へ身支度を整えに行った背中を見送り、食事をテーブルへと運ぶ。雑誌で紹介されているみたいにおしゃれなものではないが、二人にとっては最高のブランチが始まる予感がして、私は心が躍った。

「今度の休みの日、二人でどこか行かないか？」

夕食後、後片付けも済んでくつろいでいたところに、私は切り出した。それを聞いて最初はきよんとしていた表情を見せていたが、いいね、どこに行こうか？と返してくれた。私はこのワクワクしているときに見える、まるでいたずらか何かを企んでいるような笑顔が好きだった。最初にきよんとした表情を見せていたのは、私から一緒に外出しようなどと言いだすことが珍しいからだろう。私はどちらかと言えばインドアなタイプで休日は二人でゆっくり映画を見たり読書をしたり、普段作らないような手の込んだ料理に挑戦したりして、いつも過ごすことが多い。しかし、このところ続けているすがすがしい秋晴れのおかげか、もしくは充実した毎日から生まれた心の余裕のせいかな、たまには外出もいいだろうという気になったのだ。

「隣町に綺麗なコスモスが咲いている自然公園があるそうだな。会社の人が話しているのを聞いてね……どうかな？」

私がそう提案すると即座にそうしよう！楽しみだね、と返事が返ってきて話はトントン拍子に進んだ。9時ぐらいに家を出ようか、車が置けなかったら困るから移動手段は電車だね、久しぶりの外出で疲れるだろうからお昼ごろには帰ろうか。こうして外出の計画を立てているだけで、なんだかワクワクしてきてしまい、それから休みの日までの数日間を遠足の日を楽しみにする子供の様に今か今かと待ちわびることになったのだ。

人を見ると却って冷静になれるものだ。しかし、この花畑は大の大人二人を年甲斐もなく喜ばせるほど、このコスモス畑は美しいものだった。

「そうだ、写真でも……」

私はいそいそとカバンからデジカメを取り出した。今どき、写真はスマホで済ませてしまう人も多いと思うが、私は5年ほど前からこのデジカメを愛用していた。特別高性能でも高級でもない普通のデジカメだが、二人の思い出を今までたくさん写してきた大切なものだ。

「ほら、笑って！」

楽しそうにコスモスの花々の一つ一つを眺めている姿にその声をかけると、振り向いてピースサインのポーズをとってくれた。その笑顔に胸が高鳴る。このはじけるような笑顔に私はとても弱いのだ。指が勝手にシャッターを押した。いつもこの幸せが永遠に続けばいいのと思う。だが、そんなことは現実にはあり得ない。だから、この幸せを切り取り私の心に刻みつけようとして、私は写真を撮るのだろう。

また一つ増えた二人の思い出の時間はあつという間に過ぎていった。

「そういえばもうお昼か……お腹すいたな」

そう話しかけると、確かに……お腹すいたね、と同調の返事を返してくれる。外出の計画を立てた時は、コスモス畑を満喫してお昼には家へ帰ろうと思っていたが、私はこの楽しい時間が終わってし

「それじゃあ、行こうか」

雲一つない秋晴れの空、さわやかなそよ風、心地の良い気温という最高のお出かけ日和だ。休日の久しぶりの外出にはもってこいな、と思いつながら私は玄関を出た。隣ではいつもよりテンションが高そうな様子ではしゃぐ愛しい恋人の姿がある。この様子を見ただけで、外出の提案をして良かったなと実感でき、今日の休日を取得するためにこの一週間いつもより多く仕事をこなさなければいけなかった苦労なんてどうでもよくなってしまう。この人の笑顔の姿ならどんなことでも頑張れる、そのような考えに至るほど私は心底この可愛らしい笑顔に惚れてしまっているのだろう。

目的地である隣町の自然公園は電車で1時間ほどのところにある。駅からは専用のシャトルバスがあるので長々と歩かなければいけないということもない、普段運動不足の体には優しい立地であった。移動時間はスマホで調べものをしたり、読書をしたりとお互い自由に過ごした。会話はあまりなかったが、目的地に到着するまでに疲れることの無い、これが二人の丁度よい距離感であるのだ。

「綺麗だな……」

到着した自然公園には色とりどりの季節の花々があちこちに咲き乱れていたが、目当てにしてきたコスモス畑は、やはり見事なものであった。ピンクや白な可愛らしい花びらが秋風で揺れている。ねえ、みて！すごいね、といつのまにか先に駆け出しはしゃいでいる姿が目に入って少し苦笑いがうかんだ。私もこの壮観な花畑をみて気分が浮かれていると思ったが、人間、自分より感情が高ぶってい

まうような気がして少し名残惜しく感じていた。それ故、いつもなら辞めておこうと引き返すような提案を口にしてしまったのだ。

「せっかく隣町まで来たんだし……どこかでお昼でも食べていかないか……？」

そう提案すると、いつもの私らしくないと思ったのか少し驚いた表情をみせたが、いいね、何食べよっか？と私に賛成してくれた。楽しい時間はまだ終わらないのだと思うと嬉しくなる。いつも食事は家で済ませることが多く、外食なんて本当にめったにないことだ。それこそ、最後に二人で外食したのはいつだったのか思い出せないくらいに。洋食か、それとも和食か……ラーメンなどの中華もいいな、と話しながら歩いていると、雰囲気よさそうなカフェを見つけた。道路沿いに出ているメニュー表によると、おいしそうなランチメニューがいくつもあった。隣で目を輝かせてメニューを見ている表情を見て、ここにしようかと、私たちは店に入った。

「いらっしやいませ、空いているお席へお座りください」

店員が声をかけてくる。まだピーク前なのか、店内には客が3、4組いるだけだった。適当に窓際の席へ座る。メニューを見てみると日替わりのランチメニューがおすすめだと書いてあったので、私はそれを注文することに決めた。このように、おすすめ！とか期間限定、だとかいう文字に私は弱いのだ。セットでドリンクが頼めるらしくアイスコーヒーを付けることにした。こっちの秋の味覚定食にするか……それともきのこパスタにするか……どう思う？と聞かれた。こういうときは最後の一押しをしてあげるのが私の役目だ。

「秋の味覚定食は白米を栗ご飯に変更できるらしいな。栗ご飯、好きだろ？」

そう言うと、じゃあこっちにすると無事メニューを決めることができたようだ。さっそく備え付けのベルで店員を読んで注文する。「ご注文はお決まりでしょうか？」

「私はこの日替わりランチでドリンクはアイスコーヒーを。それから秋の味覚定食と、ドリンクはウーロン茶で。以上でお願いします」

店員は手持ちの機械に慣れた様子で何かを打ち込むと、少し何うような表情でこちらを見た。どうしたのだろうか、注文は全て言っただけだし……付け足すようなことがあるのだろうか。

「……もしよろしければ、お連れ様のお料理は、お連れ様にご到着されてからお持ちいたしましょうか？」

瞬間、私の中で何がガラガラと崩れる音がした。

男は一人であった。

男にはかつて家族がいたが、それほど良好と言えるような仲ではなかった。食事や学費などの生活に最低限必要なものの世話をしてもらっていたので、恵まれている方だと男は自分に言い聞かせていたが、家庭はすでに冷え切っており、男が十分な愛情を貰うことはなかった。また、男には特筆して『友達』といえる存在が無かった。コミュニケーションに関しては何もなく不可もなく。必要な時に必要なことを話せるだけの人たちはいたが、ただそれだけだった。グループを作る際には人数調整に使われ、休み時間には空気のように

過ごした。名前を呼ばれる際には常にさん付けだったし、卒業アルバムは真つ白なまま、男の学生生活は終わった。そして、そんな人間関係は男が社会人になり就職してからも特に変化することなく、男は誰の『特別』にもならなかった。

男は一人であったが、独りではなかった。

最初は小さな心の声だった。男が辛いとき、悲しいとき、男は自分に言い聞かせてきた。自分は悪くない、よく頑張ったと。自分で自分を認め、慰めることで心の平穏を保っていた。それはいつしか人格を持つようになっていく。男はそれに母のような抱擁を求めたり、友のような親しみを求めたりすることで、自分の心を埋めようとした。それは月日を重ねるごとにエスカレートしていき、やがて一つの幻想が男の中で形作られた。その幻想はやがて男が物心ついたときから願っていた、『誰かの特別になりたい』という願望を叶えた。こうして、男の中には幻想が作り上げた『恋人』が存在するようになったのだ。

『恋人』のいる日常は男にとって、とても居心地の良い楽園だった。『恋人』は男の望むときに望む言葉をかけてくれ、男のことを一番として扱った。あふれんばかりの愛情を言葉で、態度で、表情で示し、男の心を満たしていった。男の行動理由はこの楽園を守るためだけのものになり、『恋人』はそんな男を異常だと非難することなんて当然ない。二人の歪んだ日常は男が求めた愛と幸せで彩られてい

た。

店員の言葉を聞いた後、男はすぐに店を飛び出した。男は今まで無意識に他人との関わり、特に男の中の幻想が壊されてしまうような関わりは、徹底的に避けてきた。しかし、男の中でその日常があまりに当たり前のものになり、男は油断していたのだ。

男は他人に自分の『恋人』が幻想だと指摘されることで、自分の中の日常が全て虚無に還ることを何よりも恐れていた。一つ一つ積み重ねたジェンガから乱暴にブロックを抜き取ると、そのバランスは崩れてしまう。男の日常はそんなギリギリのバランスでなりたっていたのだ。

男は必死に考える。二人の日常をこれからも保つために。そうだ、調子にのらずあの時家に帰っていればよかったんだ。でも、私は今一人で走っている。また、独りになってしまう。そんなのは耐えきれない。そもそも、出かけようなんて言ったこと自体間違っていたのだ。……そうだ、今日は二人で出かけてなんかいない。今日は、家で待っている愛しい恋人のために一人でコスモス畑を写真に撮りに来たんだ。早く家へ帰ろう。この写真を見せてあげなくては。それからカフェオレを入れてのんびりと休日を過ごした。今日の出来事はそれで全てだ。

男は家路を急いだ。自宅最寄りの駅からはほとんど走っていた。早く家に帰って、恋人の存在を確かめたかったのだ。

玄関の前に着いた頃にはもうすっかり息が上がっていた。いつもとは違う、緊張した様子で鍵を開け、ドアノブに手をかける。もし、

このドアを開けても足音が聞えなかったら……あの笑顔がもう二度と見られないかもしれない。そう思うと心が張り裂けそうになった。この日常を失ってあとに生きていたって、そう思うほど男にはこの楽園が世界の全てであった。

ゆっくりと、ドアをあける。とたとたと足音が聞えた。おかえり、と笑顔で出迎えてくれる姿が目に入った。

「……ただいま！」

男の幸せな日常は、今でも続いている。

あとがき

ここまでご覧くださり、ありがとうございます。ヨシコと申します。

この話のテーマは「虚無と恋愛する話」です。恋愛とは基本的に自分じゃない誰かを好きになり、巻き込んでするものだと思うのですが、今回は自己完結できる恋愛というものを目指してみました。他人とする恋愛は、なかなか自分の思い通りにはいきませんが、自分の幻想と恋愛すれば何もかもうまくいきます。それはふと我に返るととても虚しい、まさに虚無でしょうが、反対に、我に返らず現実さえ見ることが無ければ、それは素晴らしいものになるのではないのでしょうか。自分の理想を幻想に押し付け、何の障害もない、決して裏切られず傷つくこともない、ぬるま湯の日常に浸るのも悪くないのかなと、私は思います。しかし、この現実世界ではそんな日常はあり得ないので全て妄想なんですけどね。

心理的なものや医学的なアレソレには触れず、このお話は全て捏造ですのでその辺は温かく見守って頂けると幸いです。

それでは、また皆さんのお目にかかれる日を楽しみにしています。

ヨシコ

「なあ透、俺のばあちゃんがお前に会いたがってるんだけど、明後日暇か？」

「え、ああ。暇だし良いけど、」

「じゃあ、明後日の放課後、開けていてくれな」

「分かった」

生徒会室で透と竜一の二人だけになった時だった。

特にこれと言った脈絡もなく竜一は、〈ばあちゃん〉にあつてほしいと持ち掛けた。透は、俺たちに祖母なんていたか？ と不思議に思いつながりも断る理由もなかったため、二つ返事で誘いに乗った。

透は、高校生にもなつて、血が繋がっていないとはいえず、兄弟に祖母がいたことを知らなかったなんて俄かには信じられなかった。いてもおかしくはないが、ではなぜ、竜一は自身が大変な時にその〈ばあちゃん〉を頼らなかつたのかなど、知りたいことは多かった。

幸か不幸か、透は自身の好奇心に非常に正直だった。

(でもまあ、祖母が健康なのは良いことだよな)

透は、件の竜一の〈ばあちゃん〉に会う前に、いくつか訊いておくことにした。

「なあ、竜一のばあちゃんって、どんな人なんだ？」

「どう、かあ。えつとな、三味線がめっちゃ上手くて、唄も上手くて和服が似合う美人な人だ！」

「竜がそういうのなら相当なんだろうな」

「それとな！ ものすつごい長生きなんだ！ ありゃあ、当分くたばんねえな」

「それは良いことじゃねえか」

「うん。まあな」

そう言つて笑う竜一はどこか曖昧で、何か、重要な何かを隠しているのではないか、そんな雰囲気は透は感じ取った。

それが、一昨日のこと。

「なあ竜、どこに向かつてるんだ？ おまえのお祖母さんは、この辺りに住んでるのか？」

「いんにゃ。最寄りはこのバスの終点なんだ」

「意外と近いな」

「そ、そーだな」

放課後に向かつていく先として少し遠くはあるが、竜一が急に言い出すときは冗談にならないくらい遠出をすることがよくあるので、まあそんなもんかと、距離感に関しては感覚が完全に麻痺していた。

また、透は「兄弟の祖母にあいさつをする」ということで、手土産を用意しようとしていたのだが、竜一に止められたため自分の荷物し

か持ち合わせていない。大事な兄弟の祖母に会いに行くというのに、手土産の一つも持っていないことが少し気がかりだった。

「な、なあ竜？ 何かその、手土産とか持つてこなくて本当に良かったのか？」

「うん。貰つても、ばあちゃんには受け取れないから平気だ！ 気にすんなつて」

透はこの言葉に、竜一の祖母は、ひどいアレルギーを持っているのではないかと思つた。

「あー、食べ物だめなのか？ なら花束の一つくらい用意するぞ」

「ええと、そういうことではないから、本当に平気だからさ」

透の提案に竜一は困つたように笑つて気まずそうに顔をそらす。

いつもの快活な竜一らしからぬその反応に、透は少なからず困惑していた。

思えば竜一の言動は、はじめから妙な点がたくさんあった。何か気まずいことでもあるのか、いつもはもつと、俺よりも言葉が多いのここ最近は何に口数も少ない。

「……どういう意味なんだ？」

透は、本人が目の前にいるんだからと、素直に訊くことにした。

「やー、ちょっと、俺にもなんて言つたら良いか分かんなくてさ。ばあちゃんと俺は、ええつと……、とりあえずさ、血はつながつてないんだ。もしかしたら、遡れば、どっかで繋がってるかもしれないけど〈俺の両親のどつちかの母親〉って意味での〈ばあちゃん〉じゃない

んだ。言うなら〈ガキの頃から仲良しな近所のばあちゃん〉つてとかか？ 俺の血縁の祖母はどつちも他界してつからな。だからまあ、とりあえず、〈ばあちゃん〉つて言つたけど、血縁者つて意味じゃないんだ」

透は、竜一の話に色々突っ込みたいこともあったが、飲み込んで続きを促した。

「……それで？」

竜一は透から目を若干逸らしながら続ける。

「えーつと、それでな、その〈ばあちゃん〉に、『最近、兄貴ができて楽しそうじゃないか。ちょっと顔見せに来なさい』つて、言われちまつて」

「……え？」

「や、なんか、俺に双子の兄貴ができたつて言つたら、なんか、透の目の色が好きみたいで『一度直接話したい』つて」

「はあ？」

「んー、俺もこんな感じに人を呼んで来いなんて言われた事、今までなかったからさ。まあ、本当に話だけでもしてやつてよ」

「それは、良いけど……」

そこで、透は気がついた。

竜一は〈ばあちゃん〉に、透が兄貴になった、と言つただけなのになぜ彼の祖母は、俺の目の色を知っているのか、と。

「なあ、竜。そのお祖母さんは、俺と会つたことがあるんじゃないの

か？」

「いやえっと、直接は無いつつーか……、たまにこの辺ふらついたりしてるけど、えっと」

「…たまたま見かけただけってとこか？」

「うん、まあ、そういうことにしといて」

「なんだそれ。竜、なんか今日変だぞ」

「ううっ……あ、もう着くから後は着いてからってことで！」

「おい、」

説明しにくいから今これ以上訊いてくれるな、と言わんばかりの橋上をした竜一は気まずそうにバスの停車ボタンを押す。

バスが止まり、降りると、竜一はスタスタと歩いていく。透はその後ろを大人しくついていく。

平日の夕方にしては行きかう人が少ない通りを歩きながら、竜一は口を開いた。

「あのさ、やつば、俺とへばあちゃん」の出会い方のこと話しといたほうが良いかもしれない。ちょっと聞いてくれるか？」

「ああ」

そうして松川竜一の、荻野竜一だったころの昔話が始まった。

俺とへばあちゃん」が出会ったのは、俺が小一か小二の頃で、十年ぐらい昔のことだった。

そっと本殿の中を覗いてみたり、鎮守の森っぽい雑木林を歩いてみたり。神社に何か悪いのがいたんならすぐ帰るけど、その神社の神様はなんかこう、すっごくのんびりした感じで、神社の中をうろつく子どもに興味を持つてわけでもなくて、ただ縁側から庭で遊ぶ孫を見るみたいな感じで見守ってくれてて、なんかあったかかったから、それなら遠慮なくって好きに遊ばせてもらってた。

けど、やつぱり蔵が気になってさ。扉は持ち手が錆びてて、素手で触ったら怪我しそうだったし、窓もあつたけど、高くてのぞき込めなかつたし。子どもの俺が蔵の周りをうろついてても神様は別に怒ってなくて、むしろ、のほほんとしてたから、俺はどうにか蔵の中を見ようと考えた。

その結果、俺は一旦神社から出た。近所にあつた個人商店から小さい脚立を借りて、また神社に向かつて、ようやく、俺の手が蔵の窓に届いた。まあ、窓は閉まってただけ。両開きの古い木の窓で、内開きらしいそれは雨風にさらされてもう、それはそれは、すごく傷んでいた。留め具が弱つてたのか、軽く押したらキィッと音をたてて簡単に開いた。中からは、埃とかカビとかの匂いが冷たい空気と一緒に匂ってきた。

俺は蔵の中を覗き込んだ。

その瞬間、目が合った。

俺の元の両親は、俺のことなんか興味もなかったし、新しい女やら男やらのところに入り浸るような奴らだったから、家にあんまりなくてさ。親戚付き合いなんかもろくに参加してないような人たちだったから、良好な家族関係ではなかったよ。

でも俺は、夏休みとか冬休みとか、長期休暇明けの学校でクラスメイト達が「祖父母の家に行ってきた」って言うのを聞いて、羨ましかったんだ。まあ俺、へおじいちゃんとかへおばあちゃん」っていう存在に憧れてたんだ。

そんな春休みのある日、俺は、学校の周りで行ったことのない場所に行こうと思って、散歩してたんだ。「探検」って言ってな。いつもの家の周りから離れて、空き地を探してみたり、公園に行ってみたり、まあ、俺こんなじゃん？ 近寄ってくる奴らもいたから、話し相手には困らなかつたんだけどよ。

ただまあ、迷子かと思われたら困るからさ、交番にはよく顔出してたよ。面倒事色々避けられるしな。近所の交番のお巡りさんたちも平和な住宅街だったから基本的に暇してたみたいだったしな。

それで、町中を探検したら、ひとつの神社を見つけた。

その神社はかなり寂れていて「人気無いなだなー」なんて低学年の俺が思うほどだった。その神社には、神主さんも巫女さんもなく鳥居と石畳に狛犬。手水舎と本殿、それと、小さな蔵が一つあるだけだった。

神社に参拝して神様に挨拶してから、神社の中を探検した。

「あ、もうそろそろ着くぞ！」

「おいちよっと待て。蔵の中に竜のへばあちゃん」がいて目が合ったということ、で合ってるのか？」

「ああ。まあそんな感じー」

「いや、待て。竜、蔵の戸は鍵がしまっていたんだよな？」

「まあ、うん」

「まさか、とは思うが、訊いておくれ。その、目的地なんだが、墓場じゃないだろうな？」

「いやいや。墓場じゃねえって。ここまで来たんだから、大人しくついて来いよ」

「わ、分かった」

透は、竜一の語るへばあちゃん」との出会いの話が少々異様なことを勘付いてしまう。

血が繋がらない、と言いつつ、遡ればあるかもしれないとはぐらかし、結局「蔵の中で目が合った」ということしか事実として話されていない。

竜一は常人には感じ取れないものを感じ取れてしまう人種であり、それを知る透には空恐ろしいものを感じてしまう。

透にとつて最も苦手で、恐ろしいものとは、物理や理論の通じない相手だからだ。

日頃は自信満々な態度の透だが、珍しくも、顔色を悪くして竜一の

後ろにピタリとくっついて歩く。

「な、透。もうちょいだからさ」

「あ、おう」

「いや、ほんとにちよつと話し相手してくれたらそれでいいから、そんなに怖がるなって」

「なら、俺を怖がらせる言いまわしをやめてくれるか？」

「や、えーつと、その……………美人だぞ？」

「問題はそこじゃない」

「ま、まあ、取って食いはしない人だからさ」

「本当だな？」

竜一に引っ張られて向かった先は、国立の博物館だった。

「ここだよ」

「博物館、学芸員か？」

「はずれ！」

（それ以外に博物館にいつもいる人なんていたか？ 清掃員とかなのか？）

「まあほら、行くぞ？」

「え、おい待てそっちは、」

竜一は、通常入り口ではなく、裏口の方に回っていく。

スタッフオンリーと書かれたそこに、慣れた様子で入って行ってしまった。慌てて透もそれに続く。

「ども！ お久しぶりです！」

「やあ竜一くん。半年ぶりだね。もうすぐお客さんが途切れる頃だから、もうちょつとだけ待っててくれるかい？」

「はい。いつもありがとうございます！」

「いやいや、そういう契約だからね」

「へへっ」

職員室でにこやかに竜一を向かい入れたのは、壮年の男性だった。名札を見ると、館長とある。二人にソファをすすめ、挨拶をすると竜一たちとは入れ違いに行ってしまった。通されたソファに慣れた様子でくつろぐ竜一と、居心地悪そうに腰を下ろす透。

その内、年配の職員が二人にお茶を出した。

「ありがとうございます！」

「いやいや、一昨日久しぶりに竜一くんから連絡が来て館長もみんなも楽しみにしてたんだよ。でも、珍しいね。人を連れて来るなんて」

「やー、へばあちゃん」が『どうしても会いたい』っていうもんだからさ」

「へえ。そんなこともあるんだねえ。でも竜一君、そろそろ彼女の一人くらい連れてきてもいいんじゃない？」

「んー、芸者がその辺の心配するかなあ」

「孫ともなれば話は別だろうよ。ま、お茶飲んで待っていて。

それじゃ、失礼しますね」

「はい。いただきます」

「い、いただきます」

二人は、出されたお茶に口を付けた。

透は、先ほどから妙に乾いている口の中を潤した。

それに対して竜一は、のんびりお茶を飲んでいる。

どうやら竜一はこの博物館の常連らしい。

職員の様子からも結局、竜一のへばあちゃん」の正体は何なのか分からないままだった。

ただ一つのヒントはへばあちゃん」が芸者」である、ということだけだ。

透は、博物館で働く学芸員以外の事務方辺りの職員なのだろうと予想し、竜一の後をついていくも、通されたのは明かりのない、真っ暗な部屋だった。

地下の倉庫か何かの一室らしいその部屋は、窓など無く、扉が閉まれば本当にただの暗闇になってしまった。

「なあ竜、真っ暗だぞ」

「あ、ああそうだな」

「これは、どういうことだ？」

「ま、まあ、もうちよつとだけ待っててよ。ほら、まじで怖かったら目、つぶってても良いんだぜ？」

「……………ここまで暗かったら閉じても変わんねーよ」

透はいよいよ、嫌な予感がしてきた。変な汗をかき始める。自分の苦手とする相手の気がしてきた。

透は、自分のすぐそばにいる竜一の肩に手をかけた。

「ちよつ、透？ 痛いって」

「本当に大丈夫なんだろうな竜？ お前が取り憑かれてて、操られるって可能性も捨てきれないんだぞこっちは」

「お、落ち着けて。そんなことないから。というか、俺がほいほい取り憑かれると」お前も道連れだあああ！」

「ぎゃあああああ！！！！」

「うわっ！ 思ってたないだろ！ 透、逃げるなって」

「嫌だやめる離せ！ 俺はまだ死ねない！ 今明らかに竜の声じゃなかっただろ！！」

「あーもー！ 透はほんと頼むから落ち着け！ 取って食ったりしないからって俺言ったよな？」

「竜が操られてないとは限らないだろ？！」

「透!? 俺は取り憑かれてもないし操られてもないの！ へばあちゃん」も！ 面白がってないで何とか言ってるよ！」

不安を通り超して、パニックになっていた透は、部屋から出ようと始める。

その腕をつかんで引き止め、竜一は部屋の奥に向かって、半ば叫びながら、話しかけた。

途端に、ふわり、と甘く爽やかな、透き通ったほの甘いような匂いが透の鼻へと届いた。

こんな匂いが一体どこから、と深く空気を吸い込んだ時。

それが自分のすぐそばから、竜一につかまれている腕とは反対の方

から漂ってきていることに気が付いた。

透は恐る恐る、自らの傍らを横目で視認した。

「憑いて喰うてやろうかあ！」

「うわあああああああ！！！！！」

「あっはっはっはっはっは！」

透のすぐ隣には、いつの間にか、誰かがいた。

真っ暗な闇の中、透を脅かしている割に楽しそうな声は、まだ若い女性だ。

竜一が「ばあちゃん」と呼ぶには若すぎると透は思った。

透は悲鳴を上げて、おびえて腰を抜かし、その場にへたり込んでしまった。

その声は楽しそうに笑っていた。

「ばあちゃん、やめろって。館の人たちの迷惑になるだろー！」

「なあに。こおんな地下じゃあ、泣こうが喚こうが地上にゃあ届かんさね」

「ひい！」

「あーあー、ばあちゃん、俺の兄貴怖がらせんなって」

「老い先短い婆あの楽しみは取るもんじゃあないよ」

「老い先も何も、そもそも生きて人間じゃ、痛ってえ！ なにすんだよ！」

「まったく、口ばっかり達者になりおつてからに。ほれ、灯りを付けな」

「へいへい」

ごつり、と拳骨が落とされたような音がしてから、しばらくして、竜一の手元の方から、マッチを擦る音と、火薬の匂いがし、小さな炎がとる。

その明かりを頼りに、竜一は部屋に置かれていた何本かの和ろうそくに火を灯した。

ゆらゆらと揺らめく明かりの中で、いつの間にかその場にいた第三者、竜一の「ばあちゃん」が照らし出される。

柳染の着物に銀朱の帯が映え、鼈甲らしい簪を何本も刺した、すらりと美しい、日本美人だった。

「え、あ、本当に美人だな……？」

「あら嬉しい」

「いや、透？ 多分、もう二二〇歳になるはず、痛って！」

「全くこの子は！ 女性の歳をそう簡単にばらすんじゃあないよ！」腰を抜かしていた透も思わず感嘆の声を漏らすほどの美女である。

しかし、歳をどう見積もっても、多めに数えたとしても三十代に差し掛かったところくらいに見える。実年齢らしい二二〇歳にはとても見えない、そもそも、そんなに長寿な人間が日本にいたのだろうか。

「……やっばり、人間じゃない、のか？」

「あー、まあ、そう、だな」

「だっ大丈夫なのか！？」

「さっきのは本当に面白がって脅かしてただけで、ほんつとーうに、

ふつつーうの「ばあちゃん」だから！」

「ふ、ふふ普通なわけあるかっ！！」

竜一から、人間ではないことが肯定され、ようやく立ち上がった透は薄明りの中、壁際まで後ずさりした。

「ふふふつ、本当に怖がりだねえ。ねえ、お前さんの目、見せておくれよ。綺麗な深縹じゃあないかい。竜一の濡羽色も綺麗だけど、お前さんの、良い色だねえ」

「だ、だからって、目はあげられないぞ」

「やだねえ。目ン玉なんてもんもらつてどうすんのさ。ちよいと、怖がらせすぎたかねえ」

壁際まで下がった透を追って、竜一の「ばあちゃん」は透の瞳をのぞき込もうとする。興味津々、といった態で、背中をこれでもかというほど壁に押し付ける透によりついていった。

「ばあちゃん……。俺の兄貴で遊んでんよ……」

「なあに、良い男がいたら粉かけとかないと、何かけるってんだい。こういう綺麗な目は東北の人間にいたみたいけど、この子はどこの人間さね？」

「透はクォーターだよ。透の父方のじいちゃんがアメリカだかイギリスだかの人だったんだってさ」

「へえ！ 舶来かい？ 洒落てるねえ。なら、その髪もかい？ 綺麗な金色だねえ」

「え、さ、触るのはちょっと、やめてくれると……」

「四分の一は外国人ってことは、その国で赤や銀の髪なんかも見たことがあるんだろう？ 一度、あかがねのような色の髪は見たことがあったが、あれもまた綺麗だったのお」

「え、あ、そ、そうですね……？」

「ふふ、ほら、二人で並んで立つとくれよ。ああ、良いねえ。綺麗だねえ。絵師を呼んで描いてもらいたいくらいだよ」

「え、えええ……」

瞳をのぞき込まれ髪を触られ、壁から引き剥がされたかと思えば、竜一の隣に並べられて、透は、所在なさに立ち尽くす。

「あのさあ、ばあちゃん、いい加減にしろよ？ 珍しいのは分かるけどさ。透も困ってるだろ？」

「いいじゃあないのさ。そうそう、あんた、名前はなんてんだい？」

「ま、松川透です」

「松川透、良いねえ。」

透、ウチの竜一が世話になってんね。この子は跳ねつかえりが強く気が強うてやんちゃだから、この子の兄貴なんて大変だろう？」

「い、いえ、仲良くさせてもらってます」

「あらほんと！ 良かったねえ竜一。良い兄貴ができたじゃないの。アタシも安心だわあ」

「……何安心することがあるんだよ」

「この子ったら、今まで友達の一人も連れてこないで、こないだは三味線遊女連れてきて。せめて、ちゃんとしてきた友人のなんぼでもい

るのかしらって心配してたのよ。ほら、竜一は人でないものとか、人だったものとか、そういうものに縁があるし、危なっかしい性格もしてるだろう？ 誰か、良い友人なり良い人なり見つけて、止めてくれる相手ができないもんかとねえ」

「それはほとんど透にも言えるからな？ 透だって危なっかしくて俺が止めても止まんねーもん」

「もう！ 他人のこと話してるんじゃないよ。あんたのことよ！」

間に自分をはさんで言い争う二人に尻込みしながら、透は竜一のへばあちゃんへの正体は何なのか考えるのをやめた。少なくとも、目が綺麗だからと言って、目玉が欲しいわけではない。

「透、これが俺のへばあちゃん」だ。見た目は若いけど、多分少なくとも二世紀は経ってる。それで、こつちが俺の兄貴の松川透。同じ高校に通う生徒会長だよ。ってことで、もう紹介したから、俺たちはこれで帰るからな」

「あら。もう帰っちゃうのかい？ つれないねえ」

「そろそろ展示されなきゃお客さん困るって。ばあちゃん目当てで来てくれる人もいるかもなのに」

（て、展示？）

「しようがないねえ。今度は三味線持つておいで。また一緒に弾こうじゃないか」

「うん。また今度」

「そいじゃ、竜一と仲良くしてやってくれよ透。あんたも暇なら顔、

出しとくれ」

「えっ、はい」

「じゃ、ばあちゃん、また来るね！」

「うん、待ってるよ」

そうして別れの挨拶を済ませ、竜一は一つ、二つ、とろうそくの明かりを消していく。

再び真つ暗闇に閉ざされると、急に今までしていた何かの香りが消えてしまった。

ほの甘く、透き通るような爽やかな香り。

それがちつとも香らなくなってしまうと、竜一は手探りで部屋の中の明かりをつける。

「蛍光灯が付くなら最初からつければいいじゃないか」

「やー、暗闇じゃなきゃダメなんだよ。俺のばあちゃん」

「え？」

「ほら」

まだ目が慣れない透に、竜一はその背後を指差した。

白い光で照らされた部屋の奥、そつと立てかけられている一枚の絵が目に入る。

そこには、柳染の着物に銀朱の帯、鼈甲らしい簪を何本も刺した、すらりとした佇まいの一人の和服姿の女性が描かれていた。

日本画のタッチで描かれているが、その姿はまさしく、さっきまで竜一と話していた竜一のへばあちゃんである。

「なっ！？ えっ、絵だったのか……？」

腰こそ抜かさないものの、透はひっくり返らんばかりに仰け反り、たたらを踏んだ。

「展示の所に戻してもらわなきゃだから、俺たちはもう行かねーと」

「あ、ああ」

そうして、竜一は、館の職員に声をかけると、その絵は、何人もの手袋をはめた職員によって丁寧に運び出されていった。

それを見た透は、慄き始める。

「りゅ、竜？ とてつもなく丁寧な扱いを受けていらっしやるけど、竜のへばあちゃん」って……」

「俺が蔵で見つけた絵だよ。青楼芸者撰図って言って、何か、三枚続きの中の一枚で、俺のばあちゃんはへいつとみ」ってんだ。江戸吉原の芸者だったんだって。詳しくは教えてくれないんだけどな」

「そ、そうか……」

「あの蔵で見つけたのはばあちゃんだけだし、ほかにもへいつ花」さんとかへおはね」さんに、へおふく」さんもいるけど、話しかけられたことないんだよなあ。まあ、話しかけられないのか、話さないのかは分かんないけど」

「普通、絵は話しかけてこない、と思っていたんだけどな、俺は」

「仕方ねえじゃんよ。話しかけてくるんだもん」

竜一にそう言われてしまうと、透もそれ以上は何も言えなかった。

そして、職員にお暇の挨拶をし、今度は館の中を通って外へ出させてもらう。帰りがけに展示されているその絵を見た。

「また来るね、ばあちゃん」

「失礼します」

小さな声であいさつする竜一の隣で、透もひっそりと頭を下げる。展示されている横の説明書きには「重要文化財」の文字が書かれていた。

「悪かったな透。でもさ、俺が「絵に会いに行くから」って言ってもお前ゼってえ信じねえだろ？」

「いや、絵ですらないんだろ？ 竜のへばあちゃん」は結局なんなんだ？」

「やー、俺もよくは分かんねーんだ。本当に芸者のへいつとみ」さんがあの絵に憑いてるっつーわけじゃないと思うんだけどさ。でも、何かはわっかんねー！」

「なんなんだよマジで……」

「まー、その、ほら！ 俺のへばあちゃん」だよ！！ 三味線を教えてくれたり、お話聞かせてくれたりしたへばあちゃん」だ！ ちょおつと変わってっけど」

「分かった。そういうことで納得した方がよさそうだ」

「さーて、今日は驚かせちゃったし、俺が奢るからラーメン食いに行こうぜ」

「ああ。行こう。覚悟しとけよ、食うぞ。今日は」

「ははっ、「お前も道連れだあああー」ってな！」

「竜の奢りならいくらでも連れてくれ」

「何食おっかなー?? 豚骨で唐揚げとー、餃子とー」

「あと、チャーシュー、メンマ増しで」

二人はいつものラーメン屋へと、すっかり影が長くなった町を、とりとめもないことを話しながら、並んで歩く。

あの時、蔵の中に差し込む春の日差しの中で、たしかに和服姿の美人と目が合った。

でもそれは本当に一瞬の出来事で、瞬きをした瞬間に見失ってしまったのだ。

それでも、好奇心の塊のような子供だった俺は、蔵の中に入ろうと考え、一度その窓を閉めて家に帰った。

家に帰ってから俺は家の倉庫を探した。目当ての物は見つからず、自分のお小遣いがいくらあるか数えて、その全部を握りしめてホームセンターに向かった。それでも俺が探していた品物は見つからず、どうしようかと途方に暮れていた。そんな時、一人で店をうろつく子どもを心配したのか、年配の店員が声をかけてくれた。

「ボク、一人で買いに来たのかい？」

持ってきていたマスクをつけると、懐中電灯を片手に、蔵の中を探し始めた。

ほの暗い蔵の中は、ひんやりとしていて、埃の被った箱や何かが入った瓶、風呂敷包みの何か、そんなものばかりだった。

もちろんその場に、和服姿の女性などいない。

でも、俺はそのことから、自分は他の人には見えない何かが見えると思っていたから、あの女性も生きた人間ではないと分かっていた。だから、彼女である「なにか」がこの蔵の中にあるはず、とその中を探し回ったのだ。

子供でも、広くはない、と感じる蔵の中を探し回り、それでも見つけれなかった俺は直接聞いてみることにした。

「なあっ！ この前俺があおの窓からのぞいた時、誰かいたよな？ 誰なんだ？」

「いたよなー？ なーあー、出て来いよー。生きた人間じゃねーって分かってるからさあ」

「出てこいよお！ ちょっとしゃべりたいだけだからさあー！」
俺がまだまだ粘っていると、どこからか、ほんのり甘く爽やかで、どことなく懐かしい香りが漂ってきた。それが何の匂いで、どこから来るのか、嗅ぎ取ろうと目を閉じてマスクを取り、深く息を吸おうとした時だった。

「こら、埃は肺腑に悪いからそれはつけてなさい」

「誰だ？ こないだ目が合った人？」

「うん」

「何が欲しいんだい？ さっきからずっと探してるようだけど」

「はしご。俺でも運べて、こんくらいの幅で、俺の背より高いやつ」

「うーん、確かに、この店には無いね。でも、何に使うんだい？」

「えーっと、探検したら、神社を見つけて、遊ぶのにあつたらいいなって思ってる」

「ふうん、そうか……」

子供でも扱えて長さのある梯子が欲しかった。だが、店にあるものは、幅が広く、とても子どもが扱えるものではなかったし、第一あの窓に立てるには幅が広すぎた。

少し悩んだ店員は、俺にそっと耳打ちしてくれた。

「ちよーどいいのがなければ自分で作ればいいんだよ。ロープと木があれば、梯子なんて簡単さ」

「ほんと!？」

そうして、木工細工や日曜大工が趣味だという店員さんからこっそり廃材をもらい、俺はお小遣いでロープを買って、梯子の作り方を教えてもらった。数日かけて梯子が出来上がると、俺は慌ただしくお礼を言って、あの蔵へと向かった。

あの商店から踏み台を借りると、俺は再び蔵の窓を開けた。

小さな懐中電灯で中を照らし、梁に向かってロープを投げ、手製の縄梯子を吊るすと、俺はようやく、蔵の中に降り立った。

ふわりと埃が舞って、日差しがキラキラと反射した。

「そうさ。まったく、こんな古臭い蔵の中に入ってきちまって、服も体も汚れ放題じゃあないかい。その髪だって」

「ん？ 平気だぞこんくらい」

「あんたはそうでも親御さんは怒らないのかい？」

「あー、うん。平気だ！」

「ありゃ、そうかい」

俺が振り返ると、楽しそうに笑う美しい女性が居た。

あの時、確かに目が合った、着物姿の綺麗な女性。

「初めまして！ 俺は荻野竜一、よろしく！」

「初めまして。アタシは、いつとみさ」

「いつとみ？ 変わった名前だね、いつとみ姉さん？」

「およしよ。もう、ねえさんなんて歳じゃないんだ」

「そうなのか？」

「ああ。なにしろ江戸の生まれだからねえ」

「江戸!? それってすっげえ昔じゃん！ 長生きなんだな」

「そうだろうねえ。アタシがこの蔵に入ってから随分経っているようだし、お前さんのような子が忍び込んで来ちまうくらいだからねえ。ここは昔、神主も巫女もみいんな居たもんさ。そう簡単には忍び込めまいよ」

「そ、そうだったのか」

「にしても、おまえさんは変わってるねえ。物怖じしないし、平気でこんな場所まで入って来るし」

「だって、すっげえ綺麗な人だったから、しゃべってみたかったんだもんよ」

「……そうかい」

そうやって、照れくさそうに笑った彼女の顔は今でも覚えている。日差し越しこむ中、仄暗い蔵の中で、彼女はとても輝いて見えたのだ。

それから、彼女と蔵の中でおしゃべりした。外はどういう世界なのか、昔はどうだったのか、話しているうちに、もう日差しが弱まってしまった。

「そろそろ帰りなさい。日が陰るよ」

「はあい」

そうして俺は梯子を上り、窓を乗り越えた。

「なあ、また来ても良いか？」

「子供がこんな場所に来るんじゃないよ」

「ええ……ならば、明日また来るよ！ そんでき、ほんとに来てほしくなかったら、このはしご外しちゃってよ。そしたら俺は上れないし。諦めてほかの場所さがすよ」

「な、ちょ、ちょっと、」

「んじゃ、また明日な！」

言い逃げをするように窓を閉めて下り、埃だらけの服や髪を叩いてから、手水舎で顔も手も洗わせてもらい、家に帰った。

翌日、俺は目を覚ますと急いで支度をし、朝ご飯と食べ、こっそりと、雑巾にしてもいいような使い古したタオルを持ち出し、あの蔵へ向かった。

神社への参拝を済ませると、隅に放置されていたバケツを手水舎の水で洗い、水を汲んで、蔵の傍らに置いておいた。そして、俺が二度も借りに行った商店のおばさんから「ウチじゃ使わないから君が使わなくなったら返しなさい」と貸し出してくれた踏み台上り、窓を開けた。

俺が作った縄梯子は、まだかけたままだった。

「おはよう！」

「…おはよう」

「へへっ。外さないでくれてありがとな！」

「まったく、あんな高い梁にかけられちゃあ外したくとも外せんよ」

「そっか。でも、来てもいいでしょ？」

「……しょうがない子だねえ」

「やった、ありがと！！」

そうして俺は、梯子を伝って蔵へと入った。またマスクをつけ、昨日探し回って見つけた箒を引っ張り出し、懐中電灯の明かりを頼りに蔵の戸を探る。

「まさか、掃除しようってのかい？」

「おう！ また遊びに来るんだし、綺麗にしようと思って！ ずーっと埃まみれだったし、汚れっぱなしは嫌じゃんか」

「子どものくせに綺麗好きじゃあないか。あんた、将来良い男になるよ」

「まじ？ じゃ、掃除がんばろっつと！」

「あんまり張り切って物を壊すんじゃないよ。アタシより古いくたびれた物ばかりなんだから」

「はーい！」

おそらく、百年ぶりの蔵の大掃除に取り掛かった。

時折、暗がりから指示をくれる彼女に従い、その辺の箱の上に立って上から埃を払い、モノの埃を払ったり、払い落としたり、床も全て掃き出して、雑巾で水拭きして仕上げた。

すっかり綺麗になった蔵だったが、結局彼女の「なにか」は見つからなかった。それでも気にせず、俺は、綺麗に拭き上げた床の上に寝転がった。

「やあっと、綺麗になったー！」

「疲れたかい？」

「うん！ だってもう昼だよー。つかれたー！！」

「ここで寝るんじゃないよ。親御さんが心配するからね」

「腹減って寝らんないからだいじょーぶ。ちょっと休憩！」

「そうかい。ふふっ、ごくろうさま」

「あーあ、今日は掃除で疲れたから昼食べたら寝るかも。そしたらまた来るからさ」

「はいよ。ゆっくりおやすみ」

涼しい蔵の中で休憩すると、一旦、蔵の戸を閉め、元あったように鍵をかけなおし、昼ご飯を食べに家に帰った。

かえってすぐに風呂に駆け込み、埃まみれの身体を洗う。そして、冷凍庫から適当な物を選んで解凍し、昼ご飯にして食べた。食べ終わってから皿を洗っているうちに眠気が来て、うとうとしながら歯を磨き、自分のベッドに倒れこんで、目を覚ましたのは夕方だった。

そして、翌朝。いつも通り朝ご飯を食べ、蔵へと出かけて行った。

「おまえさん、最近毎日ここへ来ているが、友達はいないのかい？」

「いるよ。でもみんな旅行してたりさ、へいちゃんとかへばあちゃんに会いに行ったりしてさ、今こっちはいないんだ。もう少ししたら帰ってくるはずなんだけどな」

「行かないのかい？」

「俺？ 俺のは俺が生まれる前に死んじゃったんだって聞いている」

「そうかい」

彼女とおしゃべりをしてから一つ、ずっとお願ひしてみたいことがあった。

「ねえ、」

「なんだい？」

「いつとみはもう姉さんじゃないって言うし、そんならさ、俺のへばあちゃんになってくれねえ？ 血もつながってないし、若いし、ずっつ綺麗なまんまなんだろうけどさ。けど、みんなのへばあちゃん」

は時々会って喋って、昔話をしてくれたりするんだってさ。

……ダメか？」

「ふふっ、そうかい、ばあちゃん、ねえ……」

今になると、失礼なお願いだっただ。

それでも彼女は笑ってくれたのだ。

「いいよ。そんならあんたは今日からアタシの孫だ。竜一」

「まじで!? いいのか!？」

「ああ。まさか子をすっ飛ばして孫ができるとは思わんだが、お前さんみたいな利口で綺麗な可愛い孫なら嬉しいさね」

「ありがとう。ばあちゃん!」

こうして彼女は俺の〈ばあちゃん〉になり、俺は彼女の〈孫〉になった。

その後、俺は友達がちちに帰ってきてからも、度々蔵へと足を運び、ばあちゃんのおしゃべりを楽しんだ。彼女の語る昔話や怪談、子供には少し早い恋の物語なんかをたくさん聞いたし、誰にも言えないような悩みなんかもこっそりと打ち明けた。父や母のことから、恋愛相談なんかまで。

そして、俺が十歳になったころ、ばあちゃんはどこからか一竿の三味線を出し、弾き方や唄い方を教えてくれた。もちろん、唄の内容は色恋沙汰が多い。意味が分からないものは教えてくれたり、追々わかると言ってはぐらかされたりもしながら、俺はその教えの通りに三味

線を弾きこなしていった。

三味線を習い始めてから一年たったころ、小学校に、外部から三味線奏者が招かれ、演奏会が催された。俺はとても楽しみにしていて、その日が来るのをドキドキしながら待っていた。

授業当日、みんなが騒がしくしている中、じつと静かに三味線を聞いていた。ばあちゃんに習っているのとは違う、大声で唄い、叩きつけるような撥のさばき方。呼ばれていたのは、津軽三味線の奏者で、俺が習っていた小唄や都都逸とは全く異なるものだった。

授業が終わってからの昼休み、俺はこっそりと控室へと向かった。

「おや、どうしたんだい?」

「あの、三味線見せてくれませんか?」

「荻野君、ダメだよ。大切なものだから」

「いえいえ、いいんですよ。大切ではありませんが、三味線は消耗品ですからね。コイツもしばらくしたら買い替える予定なんです」

「えっ、ですが、」

「ほら、君には大きすぎるかな?」

そう言っ、彼は俺に三味線を抱えさせてくれた。俺がばあちゃんに抱えさせてもらっていたのは細棹と呼ばれる種類のもので、津軽三味線は太棹。その名の通りいつもより太い棹に戸惑いながら、弦を爪弾いてみた。音もやはり違う。力強いような音だった。

「やっぱり棹が太いからうまく握れない。唄声も大きいし。先生は、いつもあんな風に強く弾くの?」

「もしかして、三味線を習っているのかい?」

「んーと、一年ぐらい前から。ばあちゃんに習ってたんだ! 棹はもつ

と細くてあんなに大きい声で唄わないし、もつとそつと弾くんだけ」

「へえ。なら、中棹か細棹かな? 唄はどんなものを?」

「俺にはよくわからないものもあるけど、恋の唄とか。こんな感じ。

——土手に追われて飛び交う蛍の虫は、——浅黄染め、もとの白地にかえせとは、」

なんとか弾けそうな曲を選んで、いくつか歌うと、先生二人は目を丸くしていた。三味線なんて触ったこともないような子どもが、端唄や小唄といった男女の仲を唄うようなものを唄ったのだから、驚きもするだろう。

「すごいなあ。どんなお祖母さんから習ってるんだい?」

「えっと、ほんと俺の祖母ちゃんじゃなくてさ、血の繋がりは無いってこと。でも優しいし、何でも知ってるし、三味線も唄もすっげえ上手で、教えるのも上手い。ばあちゃんは自分のこと芸者さんなんだって言ってた」

「芸者?」

「うん。遊女と違って芸は売っても身は売らないんだってさ。なんかそういう矜持? があるんだって言ってた。俺には良くわかんないけど、そのうち分かるだろうから今は知ってるだけで良いってばあちゃん。先生分かる?」

「あ、ああ、すてきなお祖母さんだね」

「うん! あっ、でもナイショなんだ! 誰にも言ってない! だから先生たちもナイショな?」

「そうかい? わかったよ。でも、そんなにすごいおばあさんなら私も会ってみたいんだが、駄目かな?」

「えーっと、ちょっとわかんないけど、ダメかもしれない。いちおう聞いてみるけど、それでもいい?」

「ああ。お願いするよ」

三味線の先生と約束をして、その日の学校帰りにばあちゃんのところへ寄った。

学校で津軽三味線を習ったこと、その先生が俺に三味線を抱えさせてくれたこと、唄と演奏をほめてくれたこと、そして、俺に三味線を教えたばあちゃんに会いたがっていることを話した。

話を聞いて、ばあちゃんはいくじつと考え込んだ。

真面目な顔をして考え込むその姿に、やはり他人に教えてはいけなかったのかと、不安を募らせていた。

「竜一、いいかい? よくお聞き」

「うん」

「その先生を呼ぶのは構わないよ。ただね、蔵の戸を開けておいて、外で聞いてもらう。それと、竜一とはしばらく会えなくなるよ。でも多分、半年かそこらだ。それまで待っていていられるかい?」

「分かった。大丈夫、待てる。けど、なんでだ?」

「それは、それはね、アタシが一枚の絵だからさ」

「え？ ばあちゃん、絵だったの？」

「ああ。江戸の頃、有名な浮世絵師が摺った一枚の錦絵さね。三枚で一組だったが、ここにはアタシしかいない。それでも古いものだから博物館が何かに飾ってもらえるだろう。ここに居続ければ、おまえさんが大人になる前にアタシの絵がダメになっちまう。だから、その先生とやりに掛け合って、ちゃんとしまってもらえる場所か、飾ってもらえる場所に移らなきゃならない。分かるね？」

「うん」

「良い子だ。なら、おまえさんにはこれからアタシの言う通りに字を書いて、その先生にいつでもいいから晩に来るように言いな」

「分かった。なんて書くの？」

「そうさねえ。まずは……」

ばあちゃんに言われるがままに、その蔵の中にあつた紙と文箱を使って、文章を書いた。

書き終わって、いつでも会いに行けたのに、これからはばらく会えず、その後もたまにしか会えないばあちゃんを寂しがった俺は、あのお香の香りのするおばあちゃんにぎゅっと抱き着いていた。ばあちゃんも、そんな俺をしつかりと抱きしめてくれていた。

あんまり遅くなると、子どもが出歩いたらまずいからと、離れたがらない俺をばあちゃんは優しく帰るように促した。俺は少し泣きそうになりながらも、蔵の中で書いた手紙をしつかりと握りしめて、家路についた。

別の学年を教えていた三味線の先生に、ばあちゃんは「晩ならいつ

でもいい」ということと「少し変わった場所で、変わったことが起こるかもしれないが、それでも聞くというなら必ず来て、最後まで聞いていくように」と、ばあちゃんが言っていた通りにそのまま伝えた。

先生は少し不思議そうな顔をしながらも、今晩行くと言ってくれたので、学校帰りに案内することになった。

一日の授業が終わると先生を引き連れて、夕方の暗い道をゆつくりと歩いて行った。

戸惑う先生を促し、いつも通り神社の神様へ挨拶してから蔵へと向かう。

蔵の窓を乗り越えると、真面目な顔をしたばあちゃんが出迎えてくれた。

「竜一、ちゃんと持ってきて来たろうね？」

「うん。俺の名前も書いて、ちゃんと朱肉で親指押してきた。

拇印って、これで良いんだよな？」

「ああ、合ってるよ。ちゃんと三枚あるね？」

「うん。ちゃんとある」

「よし。それじゃ、しばらく会えなくなるだろうけど、ずっと、つてわけじゃない。待ってておくれ」

「分かった、ばあちゃん。待ってるからな」

くしゃくしゃと頭を撫でてくれるばあちゃんは、優しく微笑んでくれた。

俺は、蔵の扉を開けた。

「先生、こっち、あがりに腰かけて」

「だ、だが」

「この神社、神主さんが誰か調べようと思ったんだけど、誰も分かんないし、この土地も誰の分かんなかったんだ。多分、大人が調べると分かると思うんだけどさ、俺じゃダメだった。先生、そのうち調べてよ」

「あ、ああ」

「ほら、こっち。灯りはないけど、月が明るいから見えると思う」

「……うん」

この時点で、きっと先生は何かを察してくれたんだろう。少し表情が強張っていたが、そのまま腰かけてくれた。

先生に戸を閉めておいてくれるだけで良いと伝え、明日また学校で言っって、先に家に帰った。

蔵で、ばあちゃんがどんな曲を演奏して、どんな唄を披露したのかは知らないし、先生と何の話をしたのかも、知らないままだ。

次の日の学校の昼休み、先生のもとへ行った。三学年の授業を一日ずつなので、先生は明日にはもう、学校には来なくなる。

先生は俺が昨晩ばあちゃんに渡しておいた三枚の紙をちゃんと持って来てくれていた。もちろん、先生の署名と拇印も加えられて。

「君の言い分もお祖母さんの言い分も良くわかったよ。私もできる限りのことをしよう。ただね、」

「ただ？」

「もしかしたら、この文の通りに荻野君とお祖母さんが会えるようにするのは、ちょっと難しいかもしれない」

「そんなあ」

「ええと、君のお祖母さんはね、その、とても価値のある、ええと」

「絵なのは知ってるよ。古いものだから、どこかの博物館につて、ばあちゃんが言ってた」

「そ、そうか。ならね、私はそこまで詳しくはないんだが、君のお祖母さんはとても価値のあるものだと思う。だから、もしかしたらかなり嚴重な、えつと、とても大切に扱われるかもしれない。そうなる君と二人きりとか、付き添いで三人なんてことでも難しいかもしれないんだ。だから、もしかすると、今後は展示されている状態でしか会えないかもしれない」

「……分かった。それでもいい。ちゃんと管理できなくてばあちゃんがボロボロになるより、ずっと良い」

「そっか。なら、君のお祖母さんが言っていた通り、待っていてくれるね？」

「うん。会えるようになったら、教えてよ」

「もちろん。連絡先を交換しておこう」

そして、半年が過ぎ、一年が経とうかというある日、新聞にある記事が載った。

『三枚で一組と推測されていたが、二枚しか見つかっていなかった青楼芸者撰図。その残り一枚が東京都××区の××神社にて発見され、国の重要文化財に指定された。一般公開に向け、会場の国立博物館では準備が進められている』

そんな内容だった。

その記事を読んでいる最中、家の電話が鳴った。俺は、新聞なんて放り投げて、電話に出た。

「もしもし!？」

『荻野君だね。君のお祖母さん、無事に展示されることになったよ。それと、何とか掛け合って、ちゃんと会えるようにしてもらえたよ。今週の日曜日か土曜日、開いているかい?』

「どっちも開いてる!！」

『なら、土曜日にしようか。私も館長に挨拶しに行こう。もしたら、次からは君一人でも会わせてくれるだろう』

「先生、ありがとう! 本当にありがとう!」

「良いんだよ。物はあるべき場所にあった方がいい。それじゃ土曜日の九時博物館に待ち合わせでも大丈夫かな?」

「平気! 土曜の九時に博物館でしょ!？」

「うん。それじゃ、また土曜日に」

「うん! じゃあね先生!」

ようやく、ばあちゃんと再会できることに浮かれながら博物館までの行き方を調べていた。

土曜日。

自分で調べた地図を手に、一人で博物館に向かった。

着いた先では、三味線の先生と博物館の館長が一人でバスから降りた俺を迎えてくれた。

館長はまず、俺の見た目に驚きながらも、職員室に案内して、職員室まで通してくれ、そこで俺が先生に預けていた三枚の紙に署名し、拇印も押ししてくれた。

三枚一組のそれは、ばあちゃんが博物館に預けられても、俺とちゃんと会えるように細かな支持が書かれた誓文書だった。今でもそれは俺の手元にある。書いてある内容は驚くほど細かに書かれた確固たる覚書だ。

そんな誓文書だが、みんな何故か、印鑑ではなく拇印による押印だった。

わざわざ指を汚さずとも、俺は子どもで実印を持っていなかったから拇印にしていただけであって、ちゃんと実印を持っていたであろう大人の彼らはそれでよかったのに。

そのことについて問えば、先生はあの晩、演奏が終わって事情の説明をし終わったばあちゃんに祟られんばかりの勢いで署名と押印を迫られたらしく、咄嗟に拇印で押しただけらしい。

館長は二人が拇印で押していたから自分もそれに合わせたということだった。それを聞いて三人で笑ってしまい、館長室には笑い声が響いていた。

いよいよ、ばあちゃんと再会することになった。

ガラス越しに見たばあちゃんは、いつも見ていた柳染の着物姿で、すらりとした立ち姿の、相変わらず美しい女性だった。

明るいライトのもとで見るばあちゃんは、なんとなくよそよそしくて、もう俺とは話してくれないんじゃないかと、少し不安になってしまった。

館長が職員と一緒にばあちゃんをそつと展示されているケースから出し、別室へと運んでくれる。

部屋に置いてあった架台に絵を立てかけると、職員は席を外してくれた。そして、蛍光灯の明かりを消し、本当に真っ暗闇の中、俺と先生、そして館長は静かに待った。

どこからか、ふわりとあのお香の匂いが漂ったかと思うと、俺はその香りのする腕に、胸に、抱きしめられた。

「ばあちゃん……!」

「竜一!」

真っ暗な闇の中、俺はほぼ一年ぶりに再会したばあちゃんにきつく抱き着いた。ばあちゃんも、俺のことをしっかりと抱きしめ返してくれた。懐かしいお香の香りに着物の感触、ばあちゃんの声。再開の喜びをかみしめた。

「竜一、また少し背が伸びたかい?」

「うん! クラスの背の順で、もう真ん中より後ろ!」

「そうかい。きっとそのうち、アタシの背も追い越しちゃうんだらう

ねえ」

「もー、ばあちゃん、何年先の話してんのさ」

「なあに。子どもが大人になるなんてね、あつという間だよ。大人になつてからが長いんだから。良い男におなり。竜一。あんたはなれるよ」

「? うん」

俺は、事前に用意してもらっていたろうそくに火を灯した。

先生にも館長にも、ばあちゃんの姿は見えたらしく、館長は驚きながらも頭を下げて挨拶した。

「初めまして、その、」
「あなたがこの博物館の館長さんだね。悪いけど、この子と会えるように今後とも計らってくれ。アタシのたった一人の、可愛い孫だからね」

「はっ、はい! できる限りのことはさせてもらいます」

「よろしく頼むよ。先生も、迷惑をかけてすまないね」

「いいえ。良いものを聞かせてもらいましたし、私もいわゆる「おばあちゃんっ子」だったので、できる限りのことをしたまでです」

「積もる話もあるでしょうし、私たちは失礼します」

「荻野君、お祖母さんとお話し終わったら、外の私たちを呼ぶか、できるようなら部屋の明かりを点けてろうそくを消しておいで。火傷しないように気を付けるんだよ」

「分かった!」

学校でどんなことがあった、あんなことをした、友達とはどうだうだ。いろんな話をした。

ばあちゃんも、自分が博物館に引き取られることになるまでどんなことがあったのか、いろいろと聞かせてくれた。

楽しくおしゃべりしていて、ずいぶん時間が経ってしまった。

ろうそくがだいぶ減ったように感じるころ、俺はばあちゃんから新しい曲を教えてもらって、一通り弾けるようになっていた。

「よし、竜一。今日はこのぐらいにしておこう」

「うん。続きはまた今度な」

「ああ。また今度来るときは、館長さんに連絡してから来るんだよ」

「分かった！ 今日ちゃんと来れたから平気！」

前みたいにすぐに来れねーし、あんまり会いに来れないかもだけどさ、絶対、絶対また来るからさ、それまで待っててよ！」

「ああ。いくらでも待ってるさね」

「ん！ じゃ、またな！ ばあちゃん」

「またね。竜一」

会わせてくれていて、歴代の館長さんや職員のみなさんは本当にありがたいし、感謝している。

ただ、俺が中学に上がるくらいの頃からばあちゃんは、博物館に留まることはなく、時折ふらりと散歩でもするように都内をふらついているようだった。きっと、その気になれば、俺のところにも来れるのだろう。しかし、俺のところに来ることはなく、自分の行きたいところに行っているようだ。

二百年も経てば、世界はまるつきり変わってしまう。時代の移り変わりや新しい技術が面白くて仕方ないらしい。久しぶりに会いに行けば、出かけた先で見知った物について話してくれるし、分からなかったら訊いてくるので、話題には事欠かない。いっそ騒がしいほどに。そんな俺とばあちゃんの関係はずっと続いていくだろう。

ばあちゃんの「絵」がある限り。

俺が、ばあちゃんのもとに通える限り。

こうして、俺のばあちゃんは今でも国立博物館に展示され、俺は、時々彼女に会いに行っている。

職員が入れ替わったり館長が変わったりしても、俺とばあちゃんを

おしまい

「放課後」

秋雨善哉

夕日が綺麗な時間だった。珍しく忘れ物をしたので、教室に取りに戻った。ほとんどの生徒は帰るか、部活に行っているような時間だった。だから、教室には誰もいないだろうと思って、扉を開けた。

教室には泣いている彼女がいた。

彼女と僕はクラスメイトではあるものの、接点なんてほとんどなかった。それも当然。彼女はクラスを中心にいるような人で、いつも笑顔でとても輝いているように見えた。僕は友達も少なく、いつも教室の端でぼーっとしているようなやつだった。だから彼女と話したことも数回あるかないかだし、向こうは僕のことを覚えてないかもしれない。けれど、容姿だけでなく、雰囲気や立ち振る舞いなど、彼女の何もかもが僕からは綺麗に見えて、心惹かれていたのだと思う。

そんな彼女が教室の隅で、一人で泣いている。想い人の普段の様子からは想像もつかないような場面に出くわしてしまい、僕は頭が真っ白になった。しかし、彼女はこちらに気づいてしまっている。その為、黙ったままでもいられない。僕は何か言わなければと思った。

「あの、大丈夫ですか？良かったらハンカチ使いますか？」

と急いでハンカチを差し出しながら聞いた。彼女は少し驚いたような顔をしながら後に

「ありがとう」

と言って、ハンカチを受け取り、また泣き出してしまった。

それから暫く泣いた後、少し落ち着いたのか、彼女は泣いていた理由をポツリポツリと話してくれた。

も、よく憶えていない。

「君は優しいね」

彼女は笑ってそういった。その一言が嬉しくて、その笑顔が脳裏に焼き付いて離れなかった。

そして僕は彼女に告白しようと思ったのだった。今はまだ振られたばかりだから、もっと日がたつてからにしようと思った。多分うまくいく。そんなことを根拠もなく、考えていた。

それからまた日がたったある日のこと、彼女が笑顔でやってきた。

「ねえ、君、聞いてよ。いいお知らせがあるの」

なんだろうと思った。でも彼女が嬉しそうだからいいことだと思った。

「前に告白してくれた人が、やっぱり付き合ってくれるっていったの」

「……え？」

「いや、だからね……」

その後も彼女は何か言っていたが、何も聞こえてこなかった。頭が真っ白になった。いいお知らせ？どこがだよ。僕は彼女のことを好きで、いつか告白しようと思っていて、彼女の『優しいね』という一言がどれほど嬉しくて、彼女と話す日々が幸せで、彼女の特別になれたような気がして。ああなんという悲しい勘違いだろう。そうだ、彼女からすれば、僕は、友達ですらなく、都合のいい話し相手だったのだろう。彼女は僕の気持ちなど、全く気にしていなかったんだろう。それならせめてここで全部ぶちまけて、彼女を困らせてやろうと思った。僕が彼女の方を向くと、まだ何か話していて、その姿はとてつもなく幸せそうだった。それを見た瞬間、何も言えなくなり、今までの気持ちも消え去って、彼女を困らせるなんてとんでもないと思った。そして僕の言うことは自然と決まっていた。

「おめでとう」

どうやら彼女には好きな人がいて、告白したところ振られてしまったらしかった。話をしているときの彼女は本当に悲しそうで、何とか力になってあげたかったが、僕にはどうすることもできず、ただ相槌をうつことしかできなかった。気の利いた言葉の一つでもかけてあげられらよかったのだが、自分の無力さを感じるばかりだった。さらに心の中では、彼女が振られたことを喜んでいて、自分は、僕は無力で意地の悪い自分が嫌になった。

そんなことを考えたりしていると話が終わった。

「ありがとう。少し楽になったよ」

彼女はそう言ってほほ笑んだ。その顔は少し元気を取り戻していたように見えたが、彼女の表情を見る限り、まだ悲しみが満ちていた。いつもの様子とは違ったけれど、僕はそれも美しいと感じた。

「僕でよければいくらでも話聞きますよ」

それはおそらく親切心からだけでなく、彼女ともっと話したいという欲望もあつて出た言葉だろう。それでも彼女は、「ほんと？なら今後も話聞いてもらおうかな」と少し嬉しそうにしていた。

「また明日ね」

と帰っていく彼女を見送って、帰るころにはすっかり暗くなってしまっていた。

それからほぼ毎日、放課後になると、彼女と話すようになった。確かに話を聞くとはいったが、どうしてこうなったのだろう。彼女はどうして僕なんかを話し相手にしているのだろう。考えても分からなかった。ただ彼女と話していく中で、どんどん彼女を好きになっていく自分がいた。

そんな中、いつの日のことであつただろう。どんな話をしていたのか

「ありがとう」

彼女は嬉しそうにそう言った。

「なら僕とこうして話すのも最後にしないとすね」

彼女は少し考えてからしゃべりだした。

「それもそうだね。君と話すのは気を使わなくてよくて、とても楽しかった。君のおかげで助かったの。本当にありがとう」

その言葉だけで救われた気がした。僕は無力だと思っていたけど、助けになっていたら良かった。僕は彼女のことを好きだから、彼女が幸せならそれでいいんだと、本気でそう思える気がした。

「それじゃあね。ばいばい」

そう言って彼女は去っていった。目から落ちた小さな雫は気のせいだとして、僕は笑顔で手を振った。

それから卒業まで彼女と話すことはほぼなく、卒業してからの彼女がどうしているのかも知らない。ただこの思い出は、僕にとって素晴らしいものであり、今もずっと胸の内を輝いている。

